

誤り分析からみた英語ライティング能力の実態とその指導

石橋千鶴子

1. はじめに

英語専攻でない大学生の英語ライティング能力はどのようなもので、どのような指導が望ましいのだろうか。授業の目標によって、当然指導内容は異なる。ライティング運用能力育成を目指す授業では、どうだろうか。その場合、実際に英文を書かせ、練習量を多くしなければならないということは明らかであるが、学生が英文を書く前と書く時の指導、および書いたものに対するフィードバックは、どのようなものが求められているのだろうか。

筆者が担当する現代社会学部2年生を対象にした選択英語科目「英語コミュニケーション5、7」の授業では、総合的な英語運用能力育成を念頭に、ライティング活動とビデオを用いたオーラル活動を行ってきた。本学部1年次の必修英語科目では、ネイティブ・スピーカーによるコミュニケーション重視の総合活動が行われており(石橋1998)、それを終了した学生が2年次の本科目を履修する。1年次必修英語科目の様に到達度別のクラス編成にはなっていないため、履修者の英語能力と学習意欲には大きいばらつきが見られる。また、2年次で英語の必要単位を修得してしまうことを希望する学生が多いため、30名前後のクラスが6クラス設定されている。ライティング指導を行うためには、1クラスの学生数が多過ぎ、望ましい学習環境とは言えないだろう。3年次には、より意欲ある学生のためのディスカッション、プレゼンテーションなどを含む選択科目が用意されている。

2年次の本科目において、ライティング活動の目標としているのは、パラグラフ・ライティングの指導である。学生は、英文の基礎であるパラグラフの構成と、その中でトピックをどのように展開させていくかを学ぶ。パラグラフの構成を確認し、あとは文法的な誤りをあまり恐れずに、自分の言葉で自由に書いていくことを促す。文法的な正確さより、書くことに慣れ、自分の意思を伝えようとする試みを重視する。実際に言語を使ってコミュニケーションを試みることで、間違いを通して意思伝達能力が身につくと言われているからである(Finocchiaro & Brumfit 1983)。学生は、度々、与えられたトピックで2、3のパラグラフを書いてきて提出する。

ライティングの添削は、学生数が多い場合、教師にとって大きな負担になる。その負担をできるだけ軽くし、しかも効果的なフィードバックを求めて、いろいろな試みと提案がなされて

いる。学生同士による比較・修正 (Stevick 1986)、希望者のみの添削 (石田 1998)、チェックシートを使った自己修正 (正木 1998) などその例である。宮田 (1998) は、学生が書いているジャーナル・ライティングを定期的にチェック、学生それぞれの誤りの傾向を把握し、いくつかの誤り項目に絞ってコメントを与え、学生自身が誤りを見つけ、取り除くことを促している。外国とのEメール交換をさせると、学生は自己修正せざるをえなくなるとも言われている。しかし、正木 (1998) は、「中級下位の学生には、相互批評 (peer feedback) やチェックシートによる自己修正 (self-correction) だけでは、修正の効果が上がらない。修正の効果を上げるためには、事前に修正の重要性を認識させるための指導を行ったり、教師から適切なフィードバックを与える必要がある」と考察している。

筆者は、担当する上記科目において、学生のライティングの修正に多くの時間を費やしてきた。学生が英文を書く時には、パラグラフの構成を確認しさえすれば、文法的な誤りを恐れずに、自分の言葉で書いていくように促し、指導しているのだが、各学生へのフィードバックでは、パラグラフの構成のチェックだけでなく、文法上の誤りも訂正している。やはり彼らの書く英文の質の向上を図るためには、文法的な誤りを減らしていかなければならないと思われるからである。しかし、学生一人一人のための誤り修正は非常に時間がかかるため、その回数を減らし、授業における全体指導と組み合わせることによって、教師の負担を減らすと同時に、より効果的なフィードバックにできないものかと考えてきた。そこで、彼らのライティング能力および誤りの実態を把握し、ライティングの全体指導に役立てる目的で、誤り分析を行うことにした。

誤り分析は、中間言語の発達過程の研究のためによく使用される手法だが、教授上の文法項目を配列したり、補充授業のために必要な情報を提供してくれると言われている (Ellis 1986)。誤りの傾向を分析することで、指導において重視すべき項目を整理・確認できるだろう。学生が誤りやすい項目、その中で読み手の理解を阻害しやすい誤りの項目、さらにライティングの質の向上をはかるために確認すべき項目などを明らかにし、全体指導において学生に確認し、注意を促すことができれば、より効果的な指導が可能になるだろう。

2. 誤り分析とその結果

学生のライティング能力および誤りの実態を把握し、ライティングの全体指導に役立てる目的で、誤り分析を行った。4月の本科目第1時間目の授業で、学生に30分ほどの時間を与え、A4サイズ1枚に「英語自己紹介文」を書かせた。分析資料として、4クラス110人分を使った。

誤りの分類項目は、実際に出てきた誤りに合わせて設定した。ライティング全体の構成をまず考察し、パラグラフとしての構成ができているかどうかをチェック、次に、文レベル (構文全体) の修正が必要なセンテンスを取り出し、残ったセンテンスについて、語句レベルの修正を考えた。

110人分のライティングのセンテンス総数	1102
修正の必要なセンテンス数（意味不明の文も含む）	547
誤り総数（文レベルの修正140+ 語句レベルの修正延べセンテンス数425）	565

注) 一文一文を単独で取り出し意味を取るのではなく、文脈の中で意味を考える訳だが、便宜上、上文単位で数えた。

◆全体のパラグラフ構成を修正しなければならないもの：

パラグラフ構成の欠如 71人分/110人分 64.5%

◆文レベルの修正が必要なセンテンス（構文全体を書き直す） 計140

1. 構文の誤りを中心に修正しなければならない文
 - a. 英語構文になっていないもの、語順の誤りが中心、 28
 - b. 複数の文をつなぐ必要があるもの 23
2. 表現の誤りを中心に修正しなければならない文
 - a. 日本語表現の直訳 35
 - b. その他の表現の誤りや説明不足 27
 - c. 意味不明の文 27

◆語句レベルの修正： 計425

注1) 上記文レベル（構文全体）の修正が必要なものは、ここでは対象としない。

- 2) 不適切な語句の使用、不要な語句の使用、必要な語句の欠落も含む。それが文の構造に影響するものであっても、語句レベルの修正ですればここに含む。スペリングの誤りは含まない。
- 3) 1文の誤り項目は、最大3つまでとした。その場合の誤り数は、3と数えた。
- 4) 1文に同じ項目の誤りが複数ある場合は、1と数えた。故に実際の誤り数は、それより多い場合がある。

1. 動詞の誤り 計152

- a. 不適切な語いの使用および必要な語いの欠落
 - ・ 不適切な動詞、不要な動詞の使用 36
 - ・ 普通動詞の欠落 6
 - ・ be 動詞の欠落 7
 - ・ 不要な be 動詞（be 動詞と普通動詞の同時使用） 14

・助動詞の誤り（受動態の誤りも含む）	3
b. 動詞の形の誤り	
・不定詞の誤り	16
・動名詞の誤り	13
・主語と動詞の不一致：普通動詞3単現のs、be動詞の誤り	17
・現在分詞、過去分詞の誤り	6
c. 動詞、助動詞の時制の誤り	34
2. 前置詞の誤りや欠落（前置詞句の語順の誤りも含む）	83
3. 名詞	
a. 単数複数の誤り	44
b. 不適切な名詞の使用（日本語の混入、名詞の欠如も含む）	30
4. 冠詞の誤りや欠落	56
5. 副詞の誤り（副詞句の語順の誤りも含む）	20
6. 形容詞の誤り	17
7. 代名詞の誤り（主語の欠落2を含む）	11
8. 接続詞の誤り（欠落も含む）	9
（複数の文をつなぐ場合は、構文の誤りに含む）	
9. 関係代名詞の誤り	3
◆スプリングの誤り（上記の構文全体の修正が必要な文は、ここで調査対象としない）	計69
1. 動詞	4
2. 名詞	48
3. 前置詞	1
4. 形容詞	14
5. 副詞	2
◆伝達不能の文：文脈の中で考えて意味が理解できなかった文	計27
1. 不適切な表現が原因で意味不明（文脈からもトピックからも推測できない）	
a. 表現の誤りや説明不足	18
b. 不適切な単語	2
2. 構文の誤りで意味不明	4
3. 前後の文脈と関連のない、トピックの異なる文が混入し、理解できない	3
◆もし読み手が日本に関する背景知識を十分にもっていないネイティブ・スピーカーであったなら、伝達不可能であろうと予測される文：	計8
1. 文化的背景知識のない読み手のための説明をしないまま、日本語を使用	6
2. 日本語表現の直訳	2

3. 考 察

2年次対象英語科目において、ライティング指導を始めている授業初日に学生が書いた英語自己紹介文の誤り分析結果を考察した。まず明らかになったことは、ライティング全体をみて、パラグラフの構成になっていないものが64.5%だった。トピックが変わっても書き連ねている者、箇条書きにしている者、1行に1センテンス書くと思っている者など、パラグラフの構成について意識していない学生が半数以上を占め、指導の必要性が高いことが明らかである。手紙、Eメール、エッセーなどを書いていくために、すべての英文の基本としてパラグラフの構成を定着させることが不可欠である。

学生数の多いクラスでのパラグラフ・ライティングの指導とその効果については、筆者が1993年に考察したように(石橋1993)、ストーリーのサマリー・ライティングなどを使って指導することも有効だと思われる。内容把握のための質問を用意し、まずQ&Aを口頭作業で行い、それから書く作業に入る。答えの文をつなげば、パラグラフになるような質問を与えることで、コントロールしながら、英文パラグラフの構成を認識させることができる。

書く時は、パラグラフの構成さえ確認していれば、文法的な間違いは恐れずに自由に書いていくことを促さなければならないだろう。文法的な正確さが強調され、自由に自分の意思を表現する試みが十分になされない状況では、言語の習得が促されにくいと思われる(Krashen 1987)。Stevick (1982)も、「流ちょうさ (fluency) は、練習量と同じ程度に情緒的要素に大きくかかわっていること、そして正確さ (accuracy) を強調しすぎると、流ちょうさのこの重要な基盤が壊されることがある」と述べている。

次に、1文づつ見ると、文全体の構造の誤りを中心に修正しなければならないものが51文あった。英文構造の基本を理解していない場合は、個人的な指導が必要であろう。表現が日本語の直訳であったり、意味不明であったり、不自然なものであったりして、文全体を修正しなければならないものは89文であった。適切な語いと英語表現の増強の重要性を学生に認識させることが不可欠である。説明不足の文については、常にパラグラフを意識させなければならない。一つのトピックを説明し、発展させ、トピックが変われば、新たなパラグラフを始めるという、基本的な構成を定着させなければならないだろう。

不適切な語句については、品詞別に分類したが、動詞に関する誤りが最も多かった。不適切な動詞の使用および必要な動詞の欠落、動詞の形の誤り、時制の誤りを合計して、152あった。時制の誤り、主語と動詞の不一致をはじめとする基礎的な文法事項の誤りを再確認し、ライティングの質の向上を図らなければならない。時制の誤りなどは、理解を妨げやすい誤りと考えられている (Bates, Lane & Lange 1993)。必ずしもそうではなかったが、文の構造上も、書いたものの質の向上を図る上でも、再確認させなければならない項目である。ここでも、不適切な動詞の語いの使用が多かったことから、語いを増やすことの重要性を認識させなければならない。

前置詞の誤りと冠詞の誤りの数は多かったが、このような機能語の誤りは理解を阻害する程

度は低いと言われる (Bates, Lane & Lange 1993)。英文の質の面からも、これらは時間をかけて学んでいけばよい項目だと思われる。

名詞の単数複数の誤りも、読み手の理解を妨げることは少ないと思われるが (Bates, Lane & Lange 1993)、英文の質を下げるだろう。主語である代名詞の欠落をふくんだ文が2文あり、読み手の理解を妨げることはなかったが、英文の構造上大きな誤りであり、質という面では、大きなマイナス評価になるものであろう。

文法的な誤りは、どの程度読み手の理解を妨げるのだろうか。筆者も属している大学英語教育学会中部支部誤文研究会 (代表 丹下省吾) のグループは、日本人が書いた英文を調べ、文法的な誤りが多くても、伝達度はかなり高いとの考察をしている (大学英語教育学会中部支部誤文研究会 1998)。同グループの木村 (1996) が、高校生の書いた英文のコミュニケーション研究を始めた。木村は高校生のジャーナル・ライティングを英国やカナダに在住する6人のネイティブ・スピーカーに送り、不自然な英文や誤りを修正してもらい、その資料を分析した。その後、大学英語教育学会中部支部誤文研究会のグループが、それらの修正文から、読み手6人のうち何人が書き手の意味を正確に理解していたかを分析、これらの学生の書いた全ての文の8割弱が英語話者に正しく理解されたと結論づけた。さらに、読み手の理解を妨げた主な要因は、不適切な単語の使用 (名詞、形容詞、動詞など)、論理の飛躍・説明不足、背景知識の欠如、日本語の直訳だったと分析している。要因として出てくるのが予想されていた主語の欠落、語順、受動態などは、伝達阻害要因としては小さかったと言う。そこから、文法などの誤りがあっても、文脈から意味を理解できる場合が多かったということが言えるのではないだろうか。

今回の誤り分析でも、実際に筆者が意味を理解できなかった文は計27であり、それはセンテンスの総数1102のわずか2.0%であった。上述の大学英語教育学会中部支部誤文研究会のグループの考察と同様に、文法的な誤りが常に内容の伝達を妨げるというわけではなく、むしろそれは少ないということが明らかであった。不適切な表現であるため、文脈からもトピックからも意味を推測できないため意味不明であったものが計24文、トピックの異なる文が混入しているため、書き手の意味するところが推測できず、理解できないものが3文であった。

また、もし読み手が日本に関する背景知識を十分にもっていないネイティブ・スピーカーであったなら、伝達不可能であったらと予測される文が、8文あった。その原因は、文化的背景知識のない読み手のための説明をしないまま、日本語を使用したこと、および日本語表現の直訳であった。今回は、読み手が筆者であるため、問題はなかったのだが、読み手に背景知識がない場合は、十分な説明が必要になることも忘れてはならないだろう。

文法的な誤りがあつたり、不自然な英文であっても、伝達がそこなわれることが少ないのは、なぜだろうか。何が、意味の伝達を可能にしているのか。まず、読み手のもっている文化に関する背景知識が、リーディングにおいてもリスニングにおいても的確な推測を可能にし、理解を促してくれると言われてしている (Smith 1985) (天満1989)。「我々は、過去の様々な自己体験や、読んだり見て学んで獲得したものなどの記憶を土台にした常識的知識を持っているが、そ

の常識的知識を用いることによつて的確な推測を行い、十分な理解を得られるのだと言われている(天満1989)。そのため、情報が十分でなくても理解が成り立つわけである(石橋1995)。天満(1989:50)によると、スキーマとは、この常識的知識をより体系化したもので、「長期記憶内に貯えられている総称的概念の表現」である。状況に適したスキーマを用いることにより、推論が可能になり、読み手の時も聞き手の時も、理解を促されていると考えられている。そして、文脈が与えられ、トピックが明確であれば、一文一文の意味の理解が促進されると思われる。今回の誤りの中にも、主語である代名詞の欠落を含んだ文が2文あったが、文脈が理解を助けてくれ、読み手への伝達を妨げることはなかった。

4. 結 論

学生のライティング能力および誤りの実態を把握し、ライティングの全体指導に役立てる目的で行った今回の誤り分析を通して、本科目履修者のライティングの誤りの傾向が明らかになった。この結果を授業での全体指導に役立て、より効果的なフィードバックが可能になるだろう。さらに、ライティング運用能力育成を目指す本クラスにおいて、指導上重視したい点を以下のように整理することができた：

- 1) 書く前の指導：まずパラグラフの構成を定着させる。常にパラグラフを意識、一つのトピックについて、説明し発展させる文でもってパラグラフが構成されていることを確認することで、説明不足の文や異なるトピックの混入も避けられるはずである。
- 2) 書く時の指導：パラグラフを意識した上で、あとは自由に書いていくように促し、文法的な正確さより自分の言葉で意思を伝えることを重視する。文法的な正確さが強調され、自由に自分の意思を表現する試みが許されない状況では、言語が習得されにくいと言われており(Krashen 1987)、運用能力も養われにくいと思われる。
- 3) 書いた後の指導：授業での全体指導において、上述の分析で明らかになった誤りの傾向を学生に認識させ、英文の質の向上を図るよう促さなければならない。文法的な誤りがあるために伝達度が低下するとは限らないわけだが、ライティングの質を高めるためには、それらの誤りを意識して取り除いていかななければならない。既習の文法規則を意識させることは、誤りに気づかせるきっかけを与えることになり、間接的に言語習得につながるのでも有意義であると考えられている(小池・SLA研究会1994)。学生一人一人に対するフィードバックとこの全体指導を組み合わせることで、より効果的な指導ができるのではないだろうか。
- 4) また、適切な語い・表現を知らないために起こる誤り、すなわち、意味をなさない表現や、日本語の直訳表現、不自然な表現が、修正の大きな部分を占めており、時には内容の理解を妨げる要因にもなっていた訳である。言語習得には多量のインプットが必要であると言われる(Krashen 1987)ように、多くの英文を読むこと、聞くことにより、英語の語い・表現の蓄積を増やすことの重要性を再認識させ、個人的な取り組みを促さなければならない。

5. おわりに

誤り分析を行うことにより、ライティングの運用能力育成を目指す本クラスにおける指導内容を整理・確認することができた。特に、分析で明らかになった誤りの傾向を学生に認識させ、英文の質の向上を図るよう注意を促すことで、フィードバックをより効果的なものに行うことができると思われる。そのための全体指導の時間を設ける必要があるだろう。

誤り項目についてはさらに検討し、改善すべき点を改善し、より適切なものを設定する必要があるだろう。そして、学期始めと学期終了時のライティングについてそれぞれの誤り分析を実施、比較して、誤りの変化の有無について考察できれば興味深いと思われる。

参考文献

- Bates, L., Lane, J., & Lange, E. 1993. *Writing Clearly : Responding to ESL Compositions*. Boston : Heinle & Heinle Publishers
- 大学英語教育学会中部支部誤文研究会 (代表: 丹下省吾) 1998. 「シンポジウム: 日本人の書いた英作文のコミュニケーション尺度化の原理と応用」大学英語教育学会1998年度全国大会
- Ellis, Rod. 1986. *Understanding Second Language Acquisition*. Oxford : Oxford University Press.
- Finocchiaro, M. and Brumfit, C., 1983. *The Functional-Notional Approach : From Theory to Practice*. New York : Oxford University Press.
- 石橋千鶴子 1993. 「An Oral Approach Leading to Summary Writing : Integrated Activities for Paragraph Writing in a Large Class」『愛知淑徳大学論集 第18号』
- _____ . 1995. 「高校における外国人留学生の日本語習得—外国語学習に示唆するもの—」『愛知淑徳大学論集 第20号』
- _____ . 1998. 「1年次コミュニケーション重視の英語学習と学生の意識—愛知淑徳大学現代社会学部英語学習に関する調査報告—」『愛知淑徳大学現代社会学部論集 第3号』
- 石田久美子 1998. 「コミュニケーションを重視したライティング・クラス」『大学におけるライティング指導の課題: 実践研究の報告(2) 大学英語教育学会関西支部ライティング指導研究会紀要第3号』
- 木村友保 1996. 「生徒の書いた英作文のコミュニケーション」. 1996年大学英語教育学会中部支部大会における発表.
- 小池生夫 (監修) SLA 研究会 (編). 1994. 『第二言語研究に基づく最新の英語教育』東京: 大修館書店
- Krashen, S. D. 1987. *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Exeter : Prentice-Hall International (UK)
- 正木美知子 1998. 「英作文のクラスにおける自己修正 (self-correction) の試み」『大学におけるライティング指導の課題: 実践研究の報告(2) 大学英語教育学会関西支部ライティング指導研究会紀要第3号』
- 宮田学 1998. 「新しい英語カリキュラムの展開—ライティング分野における誤文指導—」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要第4号』
- Smith, Frank. 1985. *Reading Without Nonsense (Second edition)*. New York : Teachers College Press, Columbia University.

Stevick, Earl W. 1982. *Teaching and Learning Languages*. Cambridge : Cambridge University Press.

天満美智子 1989. 『英文読解のストラテジー』東京：大修館書店

補 遺

誤りの例

◆文レベルの修正が必要なもの（構文全体を書き直す）

1. 統語の誤りを中心に修正しなければならない文

- a. 英語構文になっていないもの。語順の誤りが中心。

In winter it have many fall snow.

Winter play sports is ski.

- b. 文をつなぐ必要があるもの

I want to go to book market in Tokyo. Because there are a lot of books.

I'm very busy every day. Because I have part-time job.

2. 表現の誤りを中心に修正しなければならない文

- a. 日本語表現の直訳

I am interested in English. But my talent of English is a little.

My parttime job is front in golf.

I have a four family, father, mother, and little sister.

- b. その他の表現の誤りや説明不足

Exercise has costs and times. And I decreased much of foods.

Miss K, who in same room, went from Nagasaki.

But I don't have car licence, and it isn't allowed to.

- c. 意味不明の文

◆語句レベルの修正が必要なもの：

1. 動詞の誤り

- a. 不適切な語いの使用および必要な語いの欠落

・ 不適切な動詞、不要な動詞の使用

・ 普通動詞の欠落

I want to tour-conductor or teacher now.

Now, I think that I want to married early

I'd like to Japanese history.

・ be 動詞の欠落

I from Ichinomiya.

When we visited Vietnam, we met some Japanese who working there.

We enjoying night life.

I interested in culture of Asia.

- ・ 不要な be 動詞 (be 動詞と普通動詞の両方を同時に使用)

In high school, I was belong to Kyudo club.

I don't like English, but I am seem to study hard.

I think I should be study hard for my college life.

My family is consist of seven people.

- ・ 助動詞の誤り

I have shocked. (ショックを受けたの意味)

But 2 brothers are not live in our house, so I miss them.

b. 動詞の形の誤り

- ・ 不定詞の誤り

I like play the piano.

I don't know how to studying.

I want go to Okinawa.

- ・ 動名詞の誤り

I dislike get out in the morning.

I enjoy to drive now.

I'm not good at speak English.

My hobby is drive.

- ・ 主語と動詞の不一致：普通動詞3単現のs、be動詞の誤り

My hobby are shopping and listening music.

In the car shop, many kinds of car wax was sold.

This flower mean victory.

Their talk were intersting and useful.

- ・ 現在分詞、過去分詞の誤り

I'm interesting sports, soccer, baseball.

I'm interest in internet, too.

To wash the car is hard, but it make me very refresh.

I was borned in Nagoya city.

I have never travel abroad.

c. 動詞、助動詞の時制の誤り

I thought that I want to speak English.

I have played baton twirling when I was high school student.

2. 前置詞の誤りや欠落 (前置詞句の語順の誤りも含む)

3. 名詞

a. 単数複数の誤り

I like listening musics, too.

Member of the club are very nice.

b. 不適切な名詞の使用（日本語の混入、名詞の欠如も含む）

My sister is two older than I.

I work a part time job.

4. 冠詞の誤りや欠落

5. 副詞の誤り（副詞句の語順の誤りも含む）

I don't like getting up at fast. (early の意味)

6. 形容詞の誤り

It's very convenience.

7. 代名詞の誤り（主語の欠落 2 を含む）

I like playing Golf, but it used money.

My favorite food is Yakiniku. But recently don't eat.

I often listen theirs music.

8. 接続詞の誤り（欠落も含む）

My sister is working, she is three older than me.

I have many friends, he and she are older than my father.

9. 関係代名詞の誤り

I have a dog which name is Jack.

◆伝達不能の文

1. 不適切な表現が原因で意味不明（文脈からもトピックからも推測できない）

a. 表現の誤りや説明不足

My cat is nine years old, and low fat.

My home is side of City. So something is nothing.

But I like some lectures, I'm going to do continue in my life.

I am from Nagoya city. I have been here.

b. 不適切な単語

My sister often studies English. She gets fuently.

2. 構文の誤りで意味不明

I feel very much Nagoya.

I think many read book.

3. 前後の文脈と関連のない、トピックが異なる文が混入し、理解できない

My favorite movie is "Great Blue". I want to many movies. I want to go French. I like orange. I want to study English. I have to study Eng-

lish.

◆もし読み手が日本に関する背景知識を十分にもっていないネイティブスピーカーであったら、伝達不可能であろうと予測される文：

1. 文化的背景知識のない読み手のための説明をしないまま、日本語を使用
合宿、宅検、宝塚、karate dojo、本の題名、その他の固有名詞
My family's dog is shiba dog and very pretty.

2. 日本語表現の直訳

I am not good at English. But I fight. (頑張りたいの意味)
They have a nice style. (スタイルがいいの意味)